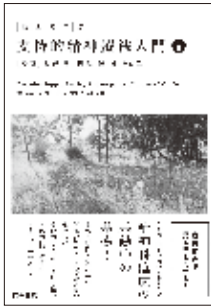


■ 書 評



動画で学ぶ 支持的な精神療法入門

大野 裕・堀越 勝・中野有美
監訳

ウインストン A, ローゼン
タール RN, ビンスカー H 著
医学書院

2015 年 5 月 272 頁

本体価格 4,200 円+税

私は、長年大学精神科に身を置き、昨年、大学を定年退職しておよそ 1 年余りが経つので、精神科臨床を始めておよそ 35 年以上にもなる。しかし、恥ずかしながら精神療法について、きちんとした教育を受けたり、成書を読んだことがなかった。もちろん精神分析や力動的な精神療法、対人関係療法、森田療法、最近はやりの認知行動療法についての成書は、体系的なものがあり、教育を受ける幾ばくかの機会もあったが、私自身の臨床では、多くの患者さんに対して、ひたすら患者さんの訴えを聞き、薬物療法を併用して支持的な精神療法を行ってきたつもりである。わが国の多くの臨床の現場では、私と同じように、精神科医と患者さんとのかかわり方は、上級医の背中を見て育てという発想が中心であり、そのような状況の中で臨床を学び、実践してきたように思う。

しかし、それでは若手医師の能力（気づきの能力、吸収する能力、実践能力）に左右される部分が大きく、また上級医の臨床能力にもばらつきがあるので、研修としては不十分にならざるを得なかったと思われる。特に、マニュアルやガイドラインを求め、さらにエビデンスに基づく医療を行いたいという最近の若い精神科医にとっては、先輩の背中を見て育てでは物足りないものがあると思われる。このたび大野裕先生ら日本を代表する認知行動療法を推進してきた先生方が米国の支持

的精神療法のテキストを翻訳された。私の知るところでは、支持的な精神療法に関するテキストは、本邦で最初のもので、ある意味、時宜を得た出版と思われる。

本書は、精神療法の基本的な考え方を軸に、具体的な態度や声かけをいくつかの症例を通して、豊富に示しており、初心者が理論と実践を学ぶのにも、上級者が自分の患者さんへのかかわりを振り返るのにも最適だと思われる。本書は、①支持的な精神療法の基礎理論、②原則と行動様式、③評価、症例の定式化、目標設定、④技法、⑤支持的な精神療法の全体的な骨組み、⑥治療関係、⑦危機介入、⑧特殊な集団への介入、⑨（レジデンスに対する）コンピテンス評価と治療成果の研究の各章が分かれおり、漠然と捉えていた支持的な精神療法がきちんと力動的な精神療法スペクトラムの中で精神分析を対極として、表出的—支持的な精神療法、支持的—表出的な精神療法、カウンセリング、支持的な関係とに分けられることを示し、意識できる問題や葛藤を扱うことなどが理論づけて説明されている。したがって、繰り返すことになるが、精神科臨床の経験が浅い初学者にも豊富な精神科医にも臨床の反省にもなり、同意できる場所、納得がいかない部分もあるかも知れないが、いずれにしても、どの年代の精神科医にも役立つ本と思われる。動画がついているのもユニークで、必ずしも最高の面接とは思わないが、それだけに問題点を含めて学習したり議論したりするのに適していると思われる。

ところで、本書は米国精神医学会（APA）のレジデント教育の教科書的書物の 1 つとして作られたものであり、こうした本を出せる APA の力も評価したい。

(中村 純)